

目的 寝室における就寝は畳の上に布団といった和式を使用するものが従来からとられていたが、近年ではベットを使用する若者が増え続けている。そこで、学生とその家族の就寝様式とその変化や寝具等の実態をみるため調査を行った。

方法 調査対象者は近畿圏より通学する短大生171名であり、163の有効票を得た。調査は1989年秋期に行い、調査内容は就寝様式、寝室や寝具の使用状況等である。また、年代別の違いをみるために調査対象者の家族についても調査した。

結果 調査対象者は主として市街地及び郊外からの通学生である。学生及びその家族の寝室の面積平均は8.2畳、1室あたり1.2人であり、学生及びその兄弟・姉妹のベッド使用率は43%、両親の世代は11%、祖父母の世代は7%となっている。学生のベッド使用開始時期は引越し、新築、自宅の確保といった住環境の変化を契機にしており、最も多いのは小学校低学年頃、次いで高校入学頃や物心ついてから継続使用している人である。寝室における和式布団からベットへの移行は、和室から洋間になって住様式が変わったことが主な要因としてあげられ、両親及び祖父母の場合も同様である。学生の就寝様式の希望では、布団使用者やベッド使用者が現状維持を希望している割合は、各々61%、88%であり両者共半数をこえている。変更を希望する場合、布団使用者のベッドへの変更希望は4割と比較的多く、ベッド使用者の布団使用希望が約1割程度であった。布団使用の現状維持派も含めてみると若い世代が必ずしもベッド使用を望んではないようである。また、布団購入には材質を、ベットではマットレスの固さを重視しようと考えている。